

新潟県小学校校長会

校長会報

題字…今山政三郎氏

発行所
新潟県小学校長会広報部
新潟市中央区万代1-3-30
万代シテイホテルビル3階
TEL 025-290-2231
FAX 025-245-6060
E-mail: nksgko@niigata-inet.or.jp
印刷所 株式会社 文久堂



大切にしたい「その学校らしさ」

新潟県小学校長会 副会長

藤本 高雄

十月下旬、昨年度勤務していた上越市立諏訪小学校の閉校記念式典に参加しました。今年度の児童数は二十二名、完全複式の学校です。私には、お気に入りの時間や風景がありました。

朝、児童玄関前で職員が子どもたちを迎えます。登校した子どもたちは下駄箱前にランドセルを置き、あいさつに加わります。最後の班が登校すると皆で玄関に入り、教室に向かいます。

私は、この小規模校ならではの時間や風景が大好きでした。このような素敵な時間を過ごした学校が今年度末で閉校になるという現実。少子化の流れの中とはいえ、とても寂しく感じます。他方、現任校である大手町小にも、同様にお気に入りの時間や風景があります。紙面の都合で紹介はできませんが、きっと県内四三〇校の小学校には、それぞれに素敵な「その学校らしい時間や風景」があることでしょう。

さて、いよいよ、令和七年度の教育

課程を検討する時期となりました。働き方改革における学校の業務改善が限界とも言われる中、「やれることはまだある」をキーワードに本当に必要なことの精選などに取り組んでいくことも必要でしょう。また、今までやってきた行事や活動を新たな形として創り直す場合もあるでしょう。そのようなときに大切になるのが、「その学校らしさ」や「職員集団の思い」だと考えます。

校長は、その検討の中でリーダーシップを発揮する必要があります。新しいウィルスが五類に移行して一年半。この先の学校像をどのように見据え、自校を導くのか。校長の腕の見せ所です。私は「大手町小らしさ」や「職員の思いを引き出すこと」を大切にし、次年度の教育課程編成に取り組みます。次年度、各校でその学校らしい様々な教育課程が編成されることを楽しみにしています。



「自立した校長会」を目指して

新潟市小学校長会

新潟市小学校長会は、本市教育の充実・発展のために、真摯に研究と実践を重ね、着実に成果を上げてきた。その成果を踏まえつつ、「令和の日本型学校教育」の実現に向けて真の「チーム学校」を構築し、将来の予測が困難な中においても未来を見据えた学校経営に取り組んでいる。

一 活動の基本方針

- (一) 新潟市教育ビジョンの実現と自校の教育課題の解決を図る。
- (二) 子どもたちのウェルビーイングを目指し、創意ある教育課程の編成と実現を図る学校経営力の向上に努める。
- (三) 教職員のウェルビーイングを目指す。直面する教育課題や働き方改革を含めた教育諸条件の整備・改善に対して、実効性のある方策を提案する。
- (四) 市及び市教育委員会や各種団体との連携・協働を図り、関東甲信越地区小学校長研究協議会新潟大会に向けた準備を進める。

二 活動の重点

【重点一】新潟市教育ビジョンの実現に向けた専門部・区校長会の活動の充実

専門部活動において各施策に対応させながら情報収集を進めるとともに、専門部間及び教育委員会との緊密な連携を図り、新潟市教育ビジョンの実現に迫っている。また、区校長会では各区の課題を明確にし、今日的な課題について協力して解決にあたっている。

【重点二】子どもたちのウェルビーイングを目指した学校づくり

全体研修や区の研修を充実させることで、学校経営者としての資質、指導力の向上に取り組んでいる。その際、課題解決に向けた効果的で効率的な研修や会議の運営改善を進めている。

【重点三】直面する教育課題に創意をもって対応する校長会活動の充実

GIGAスクール構想の実現、特別支援教育の充実、コミュニティ・スクールの推進、若手教職員の人材育成、働き方改革等の直面する教育課題の解決に向けた情報共有を図り、方策の検討や市への提言など、組織的な取組によって活動を充実させている。

今後、子どもたちに「これからの社会をたくましく生き抜く力」を育成するべく、会員の総力をもって取り組んでいきたい。

大会の概要

第七十六回全国連合小学校長会研究協議会

徳島大会報告

日時 十月二十四日(木)～二十五日(金)
会場 アスティとくしま 他

十月、第七十六回全国連合小学校長会研究協議会徳島大会が、昨年度の東京大会に引き続きフルスペック参加型で開催された。

大会主題及び副題は、「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」夢と志を持って多様な人々と協働しながら持続可能で豊かな未来を切り拓いていく人材を育む学校経営の推進」である。

【二日目】

一 開会式

山田浩之大会副会長(新潟県小学校長会会長)による開会のことばで開会。大会会長挨拶、来賓祝辞と続いた。中でも、徳島市長のあわおどりで会場は拍手喝采となった。

二 文部科学省講話

(文部科学審議官 矢野和彦氏)

開会式の後、メイン会場であるアスティとくしまにて、文部科学審議官矢野和彦氏より「教師を取り巻く環境整備と今後の教育課程等の在り方につ

いて」という演題で講話があった。働き方改革、GIGAスクール構想、次期学習指導要領、特別支援教育の四点について指導をいただいた。文部科学省も現場の実態を把握しており、確実に対応を進めていくとのことであった。

三 分科会

一日目午後の分科会は、五領域十三分科会が五会場に分かれて行われた。

第I領域「学校経営」の第一分科会「経営ビジョン」に参加した。研究課題を「創意と活力に満ちた学校経営、ビジョンの策定」とし、「未来を切り拓く力を育む学校経営ビジョンの策定」、「学校経営ビジョンに基づく創意と工夫に満ちた学校経営の推進」の二つの視点から二事例についての発表とグループ協議が行われた。

【分科会 視点①】

「笑顔」と「創造」から「成長」を目指す学校経営ビジョンの策定

～周年事業を核とした
組織目標の設定から展開する
活力ある学校づくり～

三か年を見通した学校経営ビジョンを、一年目「Try」、二年目「Challenge」というキーワードで示すことで共有化と意識化を図った取組で、周年行事を核とした実践である。グラウンドデザインの作成、若手教員の参画意識も高める組織づくり等により、活力ある学校づくりを進めている創造と創意あふれる実践の報告であった。

【分科会 視点②】

学校・家庭・地域が一体となった、活力ある学校づくりの推進

～学校経営ビジョンの
具現化を通して～

学校・家庭・地域が一体となった、活力ある学校づくりの推進に向け、幼保小の円滑な接続における文科省指定「幼保小の架け橋カリキュラム」を活用した取組と、コミュニティ・スクール及び地域学校協働本部の取組についての報告であった。

幼保小中連携コミュニティ・スクールの推進により、地域全体がひとつのチームとなって子どもを育成している実践であった。

【二日目】

一 全体会

研究協議のまとめと大会宣言が行われた。

二 講演

「神山まるごと高専の挑戦」徳島発、新しい教育のカタチ」というテーマで神山まるごと高等専門学校事務局長松坂孝紀氏による熱のこもった講演が行われた。

学生を大人と信じ、行き過ぎた支援・先回り支援は行わず、学生の「やりたい」を応援することが大切であるとのお話であった。

三 閉会式

大会会長による閉会の挨拶、次期開催県(福岡)代表挨拶があった。福岡大会のPVがあまりにも魅力的で、来年度も参加したい気持ちになった。講話、実践校の発表、講演会と、どれも未来の子どもたちの育成に向けた示唆に富んでおり、実りの多い大会となった。



学校紹介

義の心を未来へつなぐ 地域とともにある学校

上越市立春日小学校

当校は、義の武将上杉謙信公の居城があった春日山のふもとに位置し、総合的な学習で春日山の保全活動に取り組んだり、「謙信公祭」に毎年参加したりするなど、全校児童七二四人が教職員六十一人とともに地域の歴史や文化を学ぶことを通して、地域とのつながりを深めている。

一 地域とともに創るカリキュラム

当校は、十三年前にコミュニティ・スクールに指定されて以来、毎年四月と八月にカリキュラム検討会を開催し、学校運営協議会委員、学校支援本部の地域コーディネーター、市の文化振興課の職員から、各学年の教育活動計画に対する意見や助言をいただいている。カリキュラム編成を教員が行うのは当然であるが、教員は人事異動によって動く「風の人」であり、長く地域に住む方々「地の人」の視点や経験を生かしていくことが重要である。学校運営協議会の委員や学校支援本部の協力者は、活動計画に助言を行うだけでなく、実際の教育活動にも協力いただいております。地域と学校が一体となって教育活動を創り出している。そのため、当校のカリキュラムは、地域とともに築き上げられたものといえる。

当校のランドデザインは、桜の樹をイメージしており、児童が花、教職員が枝や幹となって児童を支える。そして、学校運営協議会と学校支援本部が根となり、大地で学校を支えている。このように地域とともにある学校づくりを目指して取り組んでいる。

二 教育目標「よりよくなかかわる」

昨年度開催された春日中学校区合同学校運営協議会で、未来の春日地域には「かかわり」が大切であるという意見を地域の方からいただいた。現代社会は感染症の流行や情報化の進展によって大きく変化しており、こうした時代だからこそ、学びの対象（人・もの・こと）、社会、生活、メディアなど様々なものと適切にかかわるための資質・能力を身に付けていく必要がある。そこで、今年度、謙信公の義の心にもつながる「よりよくなかかわる」を新しい教育目標とした。短い言葉であるが、「より主体的に、より対話的に、より協働的に、より健康的に、より深く」「寄り添う、見つめる、調整する、学ぶ、考える」ことを意味している。新しい教育目標が、地域と学校が共有する目標となっていくよう地域との連携を重視していく。

学校紹介

地域・校園間の連携で 子どもを育てる

阿賀野市立京ヶ瀬小学校

当校は、昨年度創立百五十周年を迎えた伝統校である。平成二十六年に駒林小学校と、平成二十六年に前山小学校と統合し、現在に至っている。新潟市に隣接している地域のせい、児童生徒が減少している昨今、当校は増加傾向にあり、今年度の児童数は三六二人の中規模校である。

教育目標「進んで行く 強い子ども」

の具現に向け、特に重点活動として取り組んでいる二点について紹介する。

一 幼保こども園小中連携の強化

幼保小の連携において、「架け橋プログラム」に基づき、五歳児と小一のカリキュラムを一体的に捉え、連携して教育内容の理解・共有を図っている。その一環として、五歳児を一年生が小学校に招待し、学習の発表や校舎案内を通し、一年生が主体的に活動したり、園児の入学への希望を膨らませたりしている。

また、小中の連携においては、KC

A（京ヶ瀬中学校区コミュニティアクション）という組織がある。児童生徒や職員が小中双方の授業参観、同じ期間にあいさつ運動の実施、商工会等と連携した学区の花壇の整備活動を行っている。それらの活動を通して、

小中九年間を見通した児童生徒の社会性の育成を目指している。また、諸活動から成果と課題を明確にし、持続可能で教育効果を上げる活動を随時模索している。

二 異学年集団による人間関係づくり

日常の清掃活動だけでなく、児童会活動等においても縦割り班活動を意図的に取り入れている。昨年度の創立百五十周年事業として、縦割り遠足を実施した。学区の地域探訪のコース途中に、地域ボランティアの方による地域に関わるクイズを取り入れ、地域理解も図った。高学年を中心に班をまとめ、とても有意義な活動であり、今年度実施した。



現在、校舎老朽化と児童増加を見込んだ大規模改修工事が行われている。新しい校舎でも、大切にしてきた教育活動を継続し、健やかな子どもの育成を目指す。





自然と歴史が息づく「ふるさと」

柏崎市米山地区

はじめに

当校がある柏崎市米山地区は、佐渡弥彦米山国定公園に指定されており、自然が大変豊かです。また、妻入りの街並みが残るなど歴史と伝統が息づく地域です。その一端と、「ふるさと」米山地区の素晴らしさに子どもたちが浸る取組をご紹介します。

米山福浦八景

聖ヶ鼻から番神岬にかけての約十二kmには起伏に富んだ美しい海岸線が続いています。珍しい形状をした岩石や洞窟などが点在し、特に美しい八つの景観を米山福浦八景と呼びます。

洞窟の一つ、福浦狸々洞(しょうじょうどう)には、三種類約二万頭のコウモリが生息しています。全国でも珍しい洞穴であることから、新潟県の天然記念物に指定されており、柏崎市のシンボルマークにもコウモリが描かれています。

また、岬には褶曲した貴重な地層を見ることが出来ます。地層の上下部分は整然として乱れていないのに、中央部は不規則に曲がったり、途切れたりしている田塚鼻の牛ヶ首層内褶曲からは壮大な歴史を感じることが出来ます。

「金の道」北國街道

七月二十七日にインドで開催された

ユネスコの世界遺産委員会において、世界文化遺産に登録された「佐渡島の金山」。その金銀を江戸まで運ぶ重要な道路であったのが北國街道です。

出雲崎湊に

陸揚げされた御金荷(金銀)は、まず出雲崎宿の人馬で

柏崎宿まで運ばれます。それを受けた柏崎宿が御金蔵



米山町の町並

のある鉢崎宿、現在の米山町まで運ぶという一日がかりの大仕事でした。一回の輸送で宿場が出す馬は、およそ四十〜七十頭だったと言われ、金銀の産出が多かった時は、それだけでは足りず、宿場近郷の村々に助郷役を課したこともあるそうです。こうして御金荷が江戸城内に到着するのは、出雲崎を出発して十一日目でした。

鉢崎関所・御金蔵

鯨波から鉢崎(現米山町)までは「米山三里」と言われる交通の難所でした。この三里に亀割坂などがあり、高低差約四十mの曲がりくねった細く、険しい道が続いていました。その地形を生かして、全国五十三関所の一つで

ある鉢崎関所が設けられました。

奉行として着任した竹村市之丞の「鉢崎関所勤め方日記」には、柏崎宿から届く御金荷の受け渡し場所が現在の青海川であったことや金を十六駄(馬一頭に負わせる荷物の量を一駄とし、一駄は一三五kg)を受け取ったこと、当番の足軽に御金蔵の見回りを一晚中させるなど厳重な警備で臨んだことなどが記されています。こうしたことから、鉢崎関所が重要な役割を果たしていたことが分かります。

鉢崎宿

交通の要衝であったことから、鉢崎は宿場町として多くの旅宿を有していました。また、荷役の中継基地としてもにぎわい、馬喰宿も多くありました。一六八九(元禄二)年の夏には、「奥の細道」紀行で松尾芭蕉が訪れています。出雲崎から約七里半(三十km)の道のりを歩いて、たどり着いた柏崎宿でしたが、宿泊を断られたそうです。

仕方なく芭蕉と弟子の曾良は、さらに約四里(十六km)ある鉢崎まで歩き、たわら屋に泊まったとの記録があります。

「ふるさと」を学ぶ

他にも米山地区には、間宮林蔵とともに樺太が離島であることを発見した松田伝十郎の顕彰碑、国指定重要文化財の大泉寺観音堂など、豊富な地域財産があります。その財産である自然や歴史・文化に、子どもたちが毎年ふれる機会が、「ふるさと遠足」です。こ

れは、十年ほど前から続いており、学校からの依頼を受け、米山地区在住で元小学校長の中山博迪地域コーディネーターによって考案された全校遠足です。

「ふるさと遠足」は、米山地区を三つに分けて、三年間で一巡するように計画され、六年間で同じ地区を二回訪れることとなります。コーディネートによる事前学習や当日のナビゲートによって、下学年での経験や学習に、上学年での新たな捉えが加わり、学びに深みや厚みが増すよう考えられています。

おわりに

地域と協働しながら「ふるさと」の素晴らしさを伝えることが、子どもたちの「ふるさと」を大切に思う心を育んでいます。恵まれた環境をさらに生かしていきたいと、気持ちを新たにしました。

※参考文献・参考資料

「柏崎・刈羽ふるさと大百科」郷土出版社

「米山地区お宝探訪マップ」

「米山地区コミュニティ振興協議会 歴史講座報告書」

県小学校長会
HPへアクセス

学校経営に役立つ
情報満載